

剪花翁傳前編

冬
十月並雜
十一月補添
十二月附方

共五

79
3875
5



門 79
號 3875
卷 5

剪花翁傳前篇卷之五



十月開花之部

元日立春之例



金石

○加島白椿 花二重 開花十月上旬 花序長くし 花保つもの

○三色椿 花二重 一輪中に淡紅小黒く かきる葩あり 又淡紅小白隈

かきる葩あり 又濃紅小白隈 いろはる葩あり 一輪小黒く 三

色とりとり 開花十月上旬

○腰蓑椿 花二重 色白 開花十月中旬 莖大きく 開く葩乃腰

葉回り副々 蓑の纏るがごとく

前花翁傳前篇卷之五

早稲田 大學 圖書館
第 26.6.8 號
藏 書

○飛龍山茶花

花八重二重開花十月中旬より咲く十月上旬盛なり
色濃紅又赤白斑入赤地小白斑入白地赤乱筋班入等此の如く每枝
小入まりて七分開き咲く最よく長く保つ花ありついで
上品の貴愛と云へ急ぐ時の菊室小入

○寒菊

花種色々開花十月中旬の赤白の花を早く収り黄花は
寒中迄やり寒菊は芽も後まで冬より開く春はうけくも
春彼岸迄は缺分相づへ又照葉あり挿花はて開雅之育方升水
の方も諸菊小同して寒風雨露霜雪で能防ぶ是は芽其の家根と掛

○寒蘭

花白朱紫等之開花十月中旬より寒中迄やり葉大き

く甚清雅して香氣高し最賞愛と云へ育方五月の蘭小同し

○一重山吹

餘醜花 花極黄葉青緑開花十月中旬より開く春まで
咲く方東南向三分陰地三分湿土莖雜肥淡小便春株二三枚花前
一兩枚度と云へ分株十月より寒中迄やり温室小入る花多

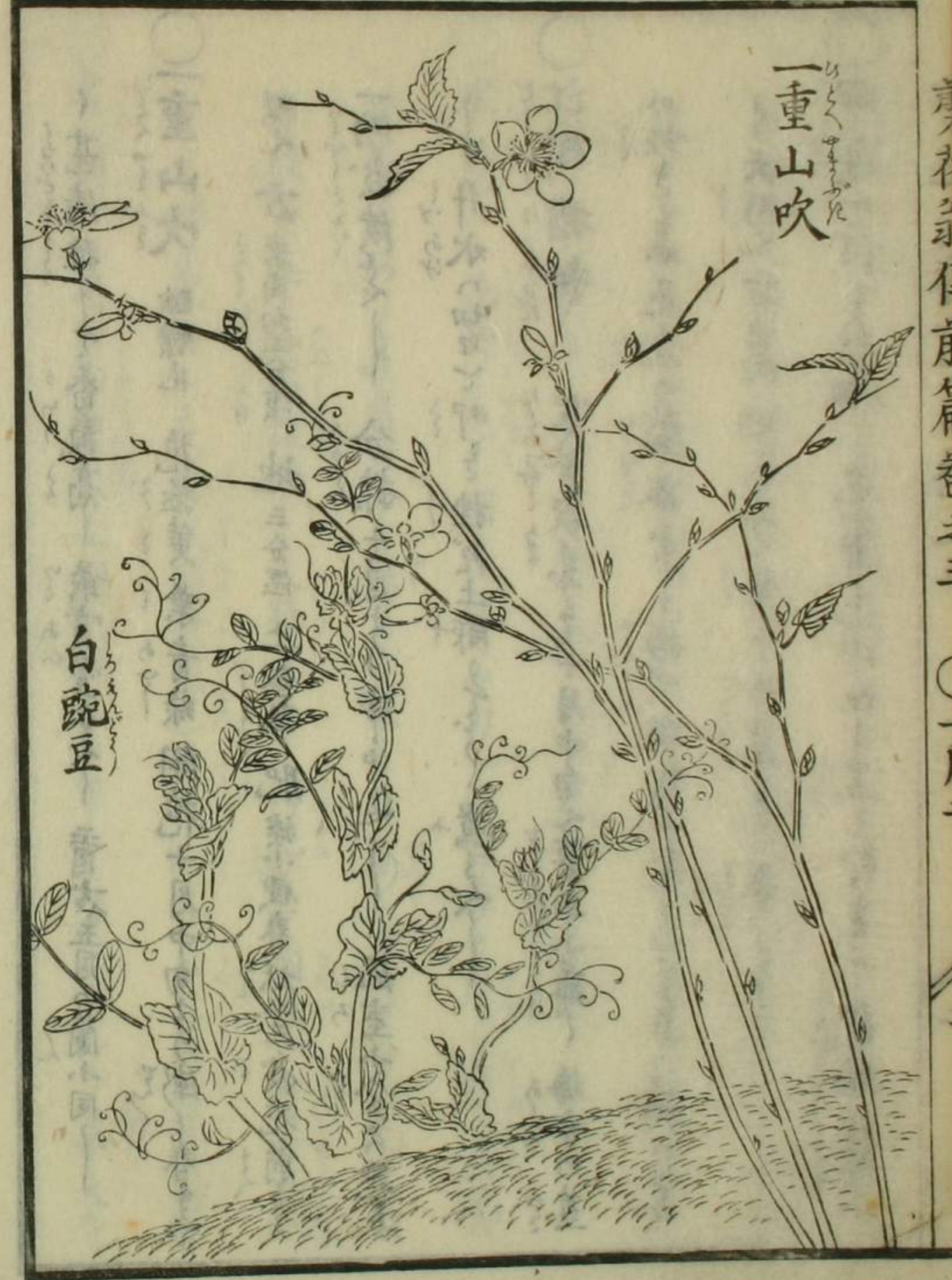
升水の切口と叩き挫れ上酢とよく煮るべし

○江州猫柳

繁苔既多し十月中旬の菱平小薄く海布の莖
の好きも亦花葉の繁密多し播州猫柳小かきしは江州の如く
く大形の方日向地一分湿之是れ平莖多し蔓あり

○田邊わびとけ椿

花一重色淡紅と黒と加色り葩縁白隈小



開花十月中旬あり

○白豌豆 花白 開花十月中旬より 潮く咲く 春ふりり

花尚りりもの秋彼岸より種すふりて如是早く咲之 方日向地ニ分濕
土回壘或ハ壘土砂離 肥 澆小便芽中 後七八日て経て五六度又花中へ
小兩三枚漬て〜 且葉建てりて寒風霜雪て覆て〜 十月の頃ハ
花類少くもえよ茶室よ専ら珍賞と此白花二種あり播州種ハ
春登て葉ふりり食とて美味なり他の白種を葉食し〜 又尋
常ハ赤花もどる秋の土用下種して春三月花咲之故不實多し

○高麗菊 花二重 葩白く 葉黄く 又黄花あり 開花十月下旬

方地土肥ハ春ハ種不同 下種五月よされ今花咲く 剪花時々
己の刺り木の刺と混まり此他ハ刺ハ剪ハ花萎凋して勢ハ失ハ
再蒸回〜 剪得く寸間焼て〜 水よく升る

○蠟梅 又臘梅 花八重 色黄 且先あり 開花十月下旬より 正月下旬

迄りり 方日向地ニ分濕 土糞と 肥 大便糞中 移分株正月は
今こ己年春己末の時候ハ中諸花次第で此花九月ハ苔見り

○寒紅梅 花二重 色濃紅 開花十月下旬より 潮く飛咲て寒中

迄りり此節より諸花もれ温室て用ふと時候或ハ木の性質或ハ苔
蕾のおもぬに〜 温室への儀言筆に述に〜 都々温室ハ麴室に止る

○雪柳 紅葉十月下旬之夏いとも花の此節飛咲とる

○水仙花 色白葉黄之開花十月末 方半陰 地三分湿 土同莖

肥莖花より又滑い便より 冬より二三分陰に 温室小入ると

あり葉黄むむらぬ青葉の白株の花莖を杆積り 移秋彼岸より

○早八重二重 花紅又紅白紋班あり 開花十月末より正月下旬迄

咲く至く上花より故小種は名ともまろく正月より咲出る中花より

○馬酔木 花白形至く之より酸漿小似るもの毎枝小群簇せり

開花十月末 方半陰 地二分湿 土山土 肥大便冬月より 移秋

彼岸より 長山生のもの又班入葉あり上名より

十一月開花之部

○冬至梅 花二重白色之開花十月上旬飛咲して小寒前小花

盛かるい立秋十日後小葉派撮取しもの自然小落葉して後咲

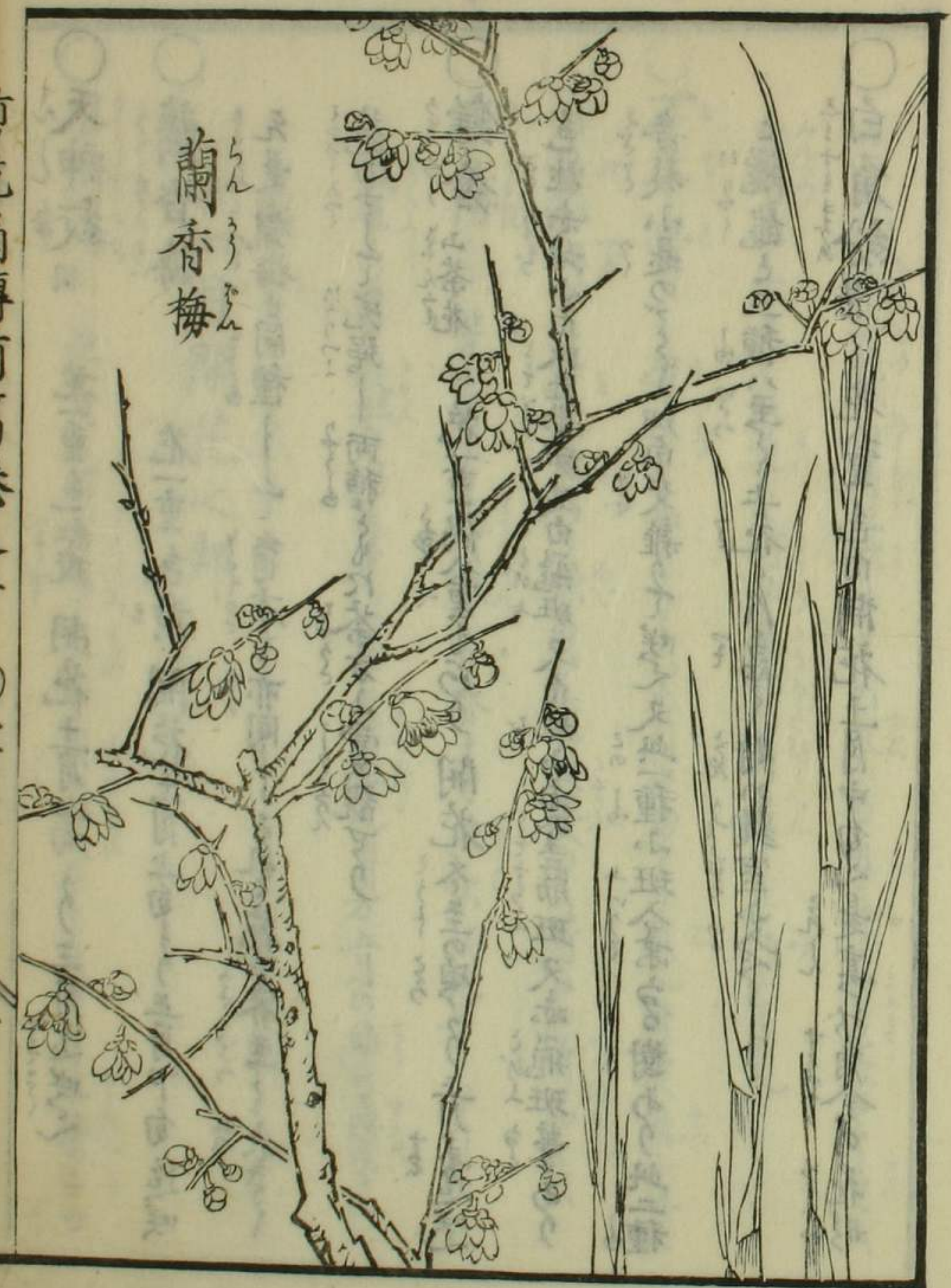
もの大寒中之南陽の國々冬至前も咲く此樹葉の皮小白く

細丸堅筋班所に見えたり

○白苺子 大輪花二重中心小細かり千重の花ありて葉を挿ひ色は形

ら金葉菊の如く芍薬花の中心の花より至て美花之開花十月上旬

○新家白 花重色太白 開花十月上旬より三月迄咲く



蘭香梅



鎌倉山茶花

寒薄

○天神紋てんじん同 花二重色紅綾べにやうり 開花十月下旬より三月迄咲く

○蘭香梅らんかうばい 花二重色黄き 開花十月下旬より正月下旬迄咲

元是蠟梅ろうばいと同種どうしゆとして育方も亦同まじしこれ花の容よう至いたく大きく

葩は卓たつして光強ひかりつやし兩種ふたしゆとも茶方ちやう賞しょう翫くわんせり

○錦倉きんくら山茶花さんぢあな 花二重偶あや八重はちものり 開花冬至の頃より正月末迄咲

色極赤地いろたぎ小白堅筋班しやくせきじんぱん又白飛班しやくひび又白地しやくぢ赤堅筋班せきけんじんぱん又赤飛班せきひび等あり

每枝小是まいしぢのどく細白交雜さいはくかうざつりて咲さ又此種このしゆ小班せうぱん入葉いりはる樹きあり此二種

と飛龍ひりゆうと三種さんしゆハ至いたく上花じやうはなより急いそく時ときハ麴室くわくしつ小入せういりへ

○白角紛しろかくまみ椿つばき 花二重色白しろ 開花十月月中旬之是真まこと角舎かくしゃの花形

より平示眼ひらしめ小白角しろかくに似にたるもの故ゆゑ小白角しろかくと呼よぶ筋花じんはな者ものは是ハ
分別ぶんべつして下花げはなより是これを河勢高井田村邊かぜたかゐらむらより出いるもの

○万年青まんねんせい 實み至いたく赤せきくちうハ十月月中旬より後のち三月方さんげハ既すで小五月

の部ぶ小出せうでり實み小黃せうわうより緑ろくあり赤せき小縱班せうじやうぱんありいハ實みも奇き品ひんなり

○寒薄かんはく 芽十月より生なげ寒さむより春はるまで照葉てうはハ用もちふなり

○蟻通あひどよりあり縱班じやうぱんハ○矢筈やはずよりあり矢筈班やはずぱんハ三月方さんげ五月の條じょうハ薄はくの

十二月開花之部

○甲州かうしゅう梅うめ 花二重色白しろ形かたち至いたく大おほき實み亦また大おほき本藥子ほんやくしの

如^じ一^{いち} 開花^{けいか}十二月^{じふにがつ}下旬^{しんげん}より咲^{さく}く正月^{しょうげつ}逢^あひの二^{ふた}月中旬^{じふにがつちゆうげん}迄^{まで}咲^{さく}之^を

○木蘭花^{きらんげ} 花^{はな}三種^{さんしゆ}紅^{こう}白^{はく}朱^{しゆ}之^を 開花^{けいか}十二月^{じふにがつ}上旬^{じやうげん}より正月^{しょうげつ}まで咲^{さく}朱^{しゆ}の

二月^{にがつ}下旬^{しんげん}方^{かた}向^{むかひ}地^ち二分^{にぶん}湿^{しつ}土^{つち}多^{おほ}く肥^こ大便^{だいべん}寒^{さむ}中^{ちゆう}之^を一^{いち} 移^{うつ}冬^{ふゆ}

月^{つき}一^{いち} 接^{つぎ}春^{はる}彼^{かの}岸^{あし}寄^よ接^{つぎ}之^を温^{ぬる}室^{しつ}八^{はち}立^た春^{はる}より入^{いれ}之^を一^{いち} 挿^さ之^を

白^{しろ}花^{はな}と専^{まづ}ら用^{もち}ひ朱^{しゆ}花^{はな}の接^{つぎ}詰^{つめ}とすべし

○黄^{わう}梅^{ばい} 花^{はな}二^に重^{じゆう}色^{しき}黄^{わう}之^を又^{また}淡^{たん}赤^{せき}と合^あせりもつり落^{おち}花^{はな}前^{まへ}の赤^{せき}之^を強^{つよ}

一^{いち} 開^{ひらく}花^{はな}十二月^{じふにがつ}中^{ちゆう}旬^{げん}より肉^{にく}く飛^と咲^{さく}つり温^{ぬる}室^{しつ}小^{せう}入^{いれ}之^を十二月^{じふにがつ}初^{はつ}より

出^で之^を正月^{しょうげつ}より二月^{にがつ}迄^{まで}咲^{さく}之^を方^{かた}半^{はん}陰^{いん}地^ち干^{かわ}土^{つち}糞^{ふん}を以^{もつ}て肥^こ油^{あぶら}粕^く花^{はな}前^{まへ}小^{せう}入^{いれ}之^を

分^{ぶん}株^{くわ}春^{はる}彼^{かの}岸^{あし}枝^{えだ}地^ち延^{のび}延^{のび}節^{ふし}より根^ねと生^なれ成^な長^{なが}三^{さん}尺^{せき}小^{せう}入^{いれ}之^を

○宰^{さい}府^ふ椿^{ちん} 花^{はな}十^{じゅう}重^{じゆう}色^{しき}濃^{のう}紅^{こう}白^{はく}絞^{しやく}之^を 開^{ひらく}花^{はな}十二月^{じふにがつ}中^{ちゆう}旬^{げん}より咲^{さく}之^を形^{かたち}ち

角^{かく}の舍^や小^{せう}似^にたりとて花^{はな}葉^はもに定^{さだ}まるとく約^{やく}して愛^{あい}とすべし北^{きた}を

撰^{せん}物^{ぶつ}五^ご山^{さん}より出^でたり南^{なん}八^{はち}和^わ沙^さ水^{すい}分^{ぶん}村^{むら} 河野金剛山の東南の地なりより出^でたり北^{きた}より

温^{ぬる}室^{しつ}小^{せう}入^{いれ}之^を葉^は黄^{わう}之^を落^{おち}しり故^{ゆゑ}小^{せう}温^{ぬる}室^{しつ}成^な嫌^{きら}り南^{なん}より

葉^は黄^{わう}之^を落^{おち}しり温^{ぬる}室^{しつ}と好^{この}みて花^{はな}早^{はや}くつり又^{また}南^{なん}北^{きた}の花^{はな}の

分^{ぶん}株^{くわ}を南^{なん}より葉^は脊^{せき}の谷^や浅^あし北^{きた}より葉^は脊^{せき}の谷^やより極^{ごく}青^{せい}葉^は

の中^{ちゆう}に班^{はん}入^{いれ}葉^は交^{まじ}りつり此^{この}水^{すい}分^{ぶん}村^{むら}に在^あり椿^{ちん}宰^{さい}府^ふ椿^{ちん}小^{せう}入^{いれ}之^を

其^{その}他^たのものの敷^ふ椿^{ちん}のものと外^{ほか}の銘^{めい}椿^{ちん}も一^{いち}株^{くわ}もなると奇^きなり

○一^{いち}重^{じゆう}雨^うが下^{した}椿^{ちん} 色^{いろ}紅^{こう}白^{はく}絞^{しやく}其^{その}大^{だい}輪^{りん} 開^{ひらく}花^{はな}十二月^{じふにがつ}中^{ちゆう}旬^{げん}より花^{はな}殊^{こと}小^{せう}麗^{れい}一^{いち}

寒木瓜
えがけ



小藤
ことう



一重兩下
いちじゅうりゅうげ

○寒木瓜 色濃紅又白まが白まがも冷赤さか氣きけりけり潔け白け

ふたりの開花えんちゅう寒えん中ちゅうより春はるにやうんんと咲さ之の方かた日向ひなた地土肥ちつちひを
とぐ挿さりりのの芽めて缺くく分ぶん植ち之の

○寒葵 花淡紅形ささらら之の蔓豆つすまぢの花はなのの開花えん寒えん中ちゅうより春はる小こ

至いたく咲さ方かた地土肥ちつちひをを下種したくさ春はる彼岸ひんがしよりより成せい長ちやうと

○小藤 花二重色紅白ふたご絞しぼ之の開花えん寒えん中ちゅうより飛と送せ見みるる色いろ淡たん

同種どうしゆより莢えい之の花はな數かず盛さか小開こえん之の

○赤苺子 花二重中小細ふたごちちろろ千重せんじゆうの葩はなありて葉はと見みるる色いろ淡たん

赤あかりり濃の赤あかりり開花えん土つち月つき中ちゅう白しろ苺い子こと同種どうしゆと至いたく美う花はなと

○わさ角 角かくの倉くらの一種いっしゆ花はな千重せんじゆう色いろ白しろ開花えん土つち月つき中ちゅう形かたち葉はありて外そと

葩はな大おほきき中心しんしん小こ手てりり衝つ之のて中心しんしんの底そこと大おほ小こ見みるる葩はな悉しつく外そと背せと

凡たゞ凡たゞ蒼そうの開ひらけけ凡たゞ凡たゞ剪花せんか者もの通言つうごん小是こ是こ裁ざい之の角かくの

倉くら椿つばきの莢えい底そこ大おほ小開こえん見みるるとと通つう稱せうなり是こ中ちゅう名なとす之の

○本阿弥の更 諸藝しよぎ妙手めうしゆ器財きざいの精巧せうこう小至こ之の世よ倍ばい是こ之の称せう

して本阿弥ほんあみと之の花はな椿つばき本阿弥ほんあみと之の花はなやと剪花せんか之の形かたち

開ひらきき答こたてての椿つばき小阿弥せうあみの一種いっしゆなりと心こころ得えるる剪花せんか者もの屢しばしばりり小阿弥せうあみの

都たてたてた花はなの形かたちは一種いっしゆの初はつて剪出せんしゆせしものて稱せうして之の本阿弥ほんあみと之の

椿つばきの一種いっしゆなりと之の花はな椿つばきの初はつて剪出せんしゆせしものて稱せうして之の本阿弥ほんあみと之の

○先悦 花二重色白ふたご偶ぐ白しろ地ち小赤せうせき細こ

縦班入りの十二輪咲交る開花十二月下旬是本阿弥光悦洛の鷹上峯
 小菴居して賞愛す故小後人の銘し呼ありとど又○嵯峨本阿弥
 花三重色白地小澄赤太縦班入りの十に八九輪咲交る開花十月上旬あり
 此樹ハ光悦播於核嵯峨とて垂生すやめて本阿弥と呼之と此兩種とも
 潔白れ又皆班あり挿花小用也此班入り類ハ藪椿小多と茶室ハ
 閑雅ハ専ら賞して駁難ハ厥ハ具光悦ハ慕やく與小賞愛するあり
 挿花者の賞せざるより各條中に攀ぶれ本阿弥の名ハ小園ハ爰出つ
 同小云僧名小阿弥と書ハ菴の假名中ハ契致ハ敬連哥等ハ假名之阿と書
 小ハ五音よりなるをこの字也即ち無の音ハ故小とて三傳と阿弥と書也

雜樹之部

- 岳松 葉ハ女松の如く枝長く冬々 方日向 地乾 土山土
 又砂離り土もいり湿度氣はいへ 肥 川芳に劣 下種移
- 唐松 葉ハ長と常の松葉より一倍せり又葉小白粉を吹之
 春彼岸より種ハ取中ハ秋の頃松毬を採収し之ハ此時と過
 あり種子あられ散之 已下に出せ 諸松育方並ハ同一
- 白髮松 葉黄白して少く青と有りて稚あり

○姫小松 葉短くして一芽三枝出づ

○五葉松 葉和らうして一芽小五枝出づ

○緑松 凡松の嫩葉ハ水より乾かすもの一方より朝夕中ハ剪得

ぎしきて切ハ小油をぬりしと焼く此焼くは切去冷水小杆

かりて後用之 又方 和木州 唐鹿尾 藻石 味切ハ小枝を焼くは

○糸杉 枝の肌濃小細長く垂柳の如くいとまわしき物之移春彼岸は

○猿猴杉 葉至く短く枝長く若松の粘付の如く甚美きもの

杉の種類ハ九月頃まで葉の色青くまより赤くして見づ 故ハ九月下旬の頃より團圓置早春中にも挿花に用ひらるべし

○矮鶏檜葉 葉枝約縮て出づ方日向地土をよみ肥大便寒中

小入へ 櫻春のうん三合陸小まきとべし 移同時あり

○植 種類あり ○朝鮮 ○羅漢 ○獅子 ○方地土肥 隨處

かり 分株 櫻春彼岸

○圓栢 一称をぬりて葉色青緑形ち組紐小似く大小の枝四方

より幹木ハ擁き恰も丸雞頭花の如く節々して繁茂す之數十

丈の大樹となりても尚是の如く 一種見塚圓栢と云り葉殊小青

櫻接 春彼岸 育方随意にるべし

○木賊 黄縱班又白縱班等あり白縱班入る希あり 方半蔭

其外育方隨意（そのつちをたがひて）なり

○火蕉 即蘘鉄 育方隨意之挿花小葉（すまじやう）を用（もち）水（みづ）の角（かど）より（より）上（かみ）を連（つら）なり

○馬蘭 斑入葉數種 方半陰 地半湿 土橋（つちがし）と肥班入葉（あつりて）

ニ鱒之青葉（あせ）の大便（おん）より 移秋彼岸（うつしあき）より（より）育（そだ）つ（つ）る（る）長四尺（ながよじふ）寸（すん）及び（及び）之

元是陰物（もとこのかげもの）と日向（ひなた）より（より）育（そだ）つ（つ）る（る）方日向地半湿 土砂雜莖（つちすなぞら）土肥洗（つちあらい）米

汁（じゅう）と浸（ひた）ぶ（ぶ）とて三月（さんがつ）より九月（くがつ）迄（まで）の黄葉（わうはつ）苦（く）む（む）とて日覆（ひぶ）とて（と）夕（ゆふ）より取（と）

とび（とび）に十月（じゅうがつ）より二月（にがつ）迄（まで）の風雨（かぜあめ）を防（は）ぎ暖氣（だんき）の日（ひ）覆（ふ）ひ（ひ）と取（と）夕（ゆふ）方（かた）に（に）今（いま）

覆（おほ）ひ（ひ）と（と）或（ある）又（また）若芽（わがめ）守（まも）り許（ゆる）し伸（のび）出（で）し時（とき）守（まも）り許（ゆる）し竹筒（たけとう）と挿（さ）し着（き）せ置（お）葉

漸（おだ）く伸（のび）る（る）に應（こた）じて竹筒（たけとう）の長（なが）丈（ぢょう）より（より）着（き）せ替（か）へ（へ）しつゝ葉先（はのさき）八寸（はつすん）又（また）六寸（ろくすん）五

歩許（ふそり）も筒（とう）より上（かみ）出（で）る（る）是（こ）の（こ）と（と）れば五尺許（ごせふそり）も伸（のび）る（る）と易（やす）い

○竹並小笹 方日向 地半湿 土回莖（つちまわら）或ハ放埃（はなつか）真土（ま）雜（ぞら）も可（よ）之（の）砂（すな）を

置（お）き（き）し（し）ば肥油（ひあぶら）粕酒糟（かすしゅさう）獸魚（けうぎょ）大小便（おほちひちひ）等（ら）總（と）く強（つよ）く厚（あつ）き物（もの）は又（また）糞（くそ）を

埃（か）つ（つ）程（ほど）も厚（あつ）く置（お）き（き）し（し）株（か）の植（う）え（え）を（を）お（お）り（り）筋（すぢ）と（と）て（と）其（その）已（いま）後（のち）下（した）枝（えだ）五

七節（しちせつ）残（のこ）り（り）と末（すえ）の方（かた）で剪止（きりど）置（お）き（き）し（し）繁（い）茂（は）く根（ね）も（も）殖（は）る（る）翌年（あつね）で徑（みち）

又翌年（あつね）の秋（あき）彼岸（ひら）より冬迄（ふゆまで）小移（こうつ）し植（う）え（え）し（し）小竹小笹（こたけこさ）も（も）並（なら）び（び）同（おな）じ

○苦竹 三月新芽（しんが）の（の）時（とき）も古葉（ふるは）尚青（なほあお）

○淡竹 性質（せいしやう）名の（の）めく鹿（か）く弱（よわ）く葉（は）新（あたら）古（ふる）も（も）以（も）て苦竹（くたけ）と同（おな）じ

○臺明竹 性質（せいしやう）理（り）鹿（か）比（ひ）て（て）厚（あつ）く男（おとこ）竹（たけ）も（も）あ（あ）り（り）女（めづ）竹（たけ）も（も）あ（あ）り（り）節間（せつかん）

一尺三寸餘不及之末で剪止枝で四寸の切置葉茂りて丸くする

○キンイ竹 名は係未考 臺明竹小黃の蹤班入り

○五三竹 又布袋竹ともいへり 株際節迫り縮まる

○鳳凰竹 竹の女竹のめく葉細長く見母小似く繁り重て葉の形似

○江南竹 即孟宗竹 下枝五七節幾て未で伐止まら夏月嫩出

細密小繁り挿花の二三年物で剪へ一二年物殊に古竹の時

依て水上げ且升水の方種はとも頗煩今簡易して植る

方で出ると左の如く ○竹の枝三節も五節も其好

長小木末で切保て先此枝葉で絞り寄葉を巻幹竹小撓付置

○ 是を取扱る易きものなり 京都の草木の花葉切保て

ハ直ちに絞り寄る風も日も凌ぐものは竹の節を先枝に

是の末の止口の枝は氷にけがして此枝節も小下り方

と摺掃いた切掃へ此切はより第一の節迄小幹竹餘分あり

小口を薬水充滿する故小枝より已下り枝を用ゐて上の切口

より枝のかり節と残らぬ貫通下の方を枝をた節と残

て筒の底に必齋で付へるが如くて ○極上酒一味右竹の中

詰る 又方 和末州 唐鹿尾藻 此二味と水とを篤と煎下此藥湯

の熱き茂竹の中流へ入元満させ小口を堅く紙で詰置此詰

紙に限るは()の()も気の洩ぬ中()心()用()
 具益の苦汁()沸()
 上件()沸竹()升水()方()並()同()
 水()升()業()至()
 簡易()水()
 ○寒竹 太()日記()筆()の()抽()許()あり()皮()の()色()淡()黒()
 也亦尚()細()之()十()月()末()
 得()て()挿()花()小()用()
 ○矢竹 其()の()び()竹()
 其()の()び()竹()
 其()の()び()竹()

○九枚筵 一()枚()小()葉()九()枚()出()
 ○五枚筵 葉()五()枚()並()び()出()
 ○小筵 ○根筵 ○兒筵 等()
 能()保()
 竹()の()青()
 唐()鹿()尾()藻()
 塗()て()焼()



此節下より切拂之

第三節

竹升上之圖

枝で絞る体

此節まで枝へ

竹節鑄刀

此節と底とをへ

補添升水之方並別傳合六十八員

此節のうは字は、蓋本文のうは字に附し

○岩藤 △灰汁煮と之

○葉牡丹 △花の莖は蔓ふやし、その湯煮と之

○花栢榴 焼あり又湯煮と之

○庭はらう 焼へ

○虎の尾艸 △萎る時根を折へ

○茶引艸 焼へ

○小手巻艸 △萎周を焼へ

○女郎花 △切改むへ

○燕子花 葉ハ逆水一て冷地小倒一卧せよ

○高麗菊 △若井ハ逆水とて

○樂州 △切口と折て灰汁煮とて一かぶらば切るとふく

○眼皮 葉ももの横小卧置よ ○川竹 △湯煮とて

○唐索吾君 △灰汁煮とて

○蔓 蔓とて △打水ふども酒、古き水ふ入れて

○瞿麥 △切口と挫ぐべし ○鬱金蕉 灰汁煮とて

○大手毬花 △切口と折て灰汁煮とて一かぶらば切るとふく

○大山蓮 湯煮とて ○芥子 △如萎調切口と挫ぐべし

○挾竹 挾 △或ハ燒或ハ煮とて ○金雀兒 花の時ハ湯煮とて

○薊 △湯煮とて ○青杜艸 或ハ燒或ハ煮とて

○紫陽花 △切口と折て灰汁煮とて一かぶらば切るとふく

○馬醉木 燒く川水小盆一腐水ハ一井水ハ大小悪一

○山丹花 水よりゆぐれ時ハ燒とて ○櫻艸 湯煮とて

○澤桔梗 △灰汁煮とて ○笹龍膽 △灰汁煮とて

○桐 かせりと同ハ強き水ハ一 ○五柳 △灰汁煮とて

○桔梗 △煮とて ○櫻梅 湯煮とて

○芽柳 △灰汁煮とて ○水芭蕉 △湯煮とて

補二

水葵 竹串とて節を貫通し水を通す

紫蘭艸 古水に新水を加えて作り

晝魚 △灰汁煮とて

仙臺菘 焼べし或は湯煮とて

別傳

機樹 楓 △切と割べし

紅葉 楓 剪去の枝小養ひ水で灌ぎ

濡涎とて巻置へし或は川水或は腐り水とて之を強き水に作り剪て

直小斯とてれは葉悉く剪之剪花者通稱とて是と稱する

中島牛心李 捻折し金氣水小へし花を保つたり

秋海棠 辛菜子粉と煉て氣味至り強きものと切り詰むべし

葉鶏頭 莖葉のうりひのちまうとて種子を摘捨て上の方より

六月月許迄小長五の皮或は一寸許見合ふ五の月小及物紙と入本方の

灰汁或は上酢とて煮るべし惣して一旦萎凋ふもの小

水とて升とて作る時々の手でも長くねつもの小

河骨 ○蓮 ○澤瀉 右各本方のてし虎尾筒と以て藥

水で弾き詰るとして虎尾筒の口小花葉等の莖の切はとて合を

握りて水で弾くも手掌より水漏るる故升水の勢はつとて

手は是れ水彈の口紙と巻竹筒と肩で詰此筒小花葉の莖とも
 紙と巻箔をくく中心棒と押しすに真直小遣ふへく上
 下より毎小捻回し捻戻とて一斯も是れ升水の氣烈しり
 破葉出葉枯葉ふとゆりも葉の筋小毎疵の所ハ水升しり
 疵の筋小ハ水通らば扱或ハ升水の方と他人のふり過るもの
 迎も此水と云ら出し又右の方の如くもて一葉凋るものも
 有非同し又奉書紙の上小建し右の如くもて直ちに切せ
 石灰小捻込其ま横小即とて一杉原紙小捻みて掛あも京
 同し此時の水と都く川驚の剪けし

○竹 △上茶一味は煎けし筒中小詰てもよくこれと云は川草と如

蕃椒の末と詰まらぬは且新古も新丹の出時即又ハ
 大暑ふど山の水上かき此時と蕃椒の末と先筒の中入後
 上酒と川草とよく煎けし詰まらぬ保つて

○割竹 △前方の如くして五七日許もよく保らぬ此時割下水小
 入とも長く保つては且水よく升て後割て又秋ハ代置で
 二三日許其まはて後小前方の如くして然るべし又代置ハ益
 備けと洗くべし八月下旬より後の割竹ともよく保つもの
 又方 竹と根堀りて三黄湯と能煎し根小洗き数日して割り

又方竹のこもを煮るまじに上より節を抜鹽滴汁と熱く沸く
詩のあり日數を經て隨意小割く

○雨後栞

立春已後十日許の内之能垂く枝を切水上く
爪とりて芥を悉くおろし又水中小挿置ハ露おろる之但大
垂栞糸柳ふら隨分ふら枝は升水の方根よく挫ぎ栞木

艸唐鹿尾藻とて能燒水上く後此燒らば切捨水中に
入る或云芥を摘ふらば其俗方を用之是ハ燈油を用ふ

ありとてさうの試と追考して後編の小あざ

○雨中燕子花

此方ハ藥水小らば葉の紐中よく水滴く此

葉ハ數十枚の中三枚あつて此業書中ハ述べ

○結南燭

△ホ小紙を巻て水に浸し食鹽を塗附よく

き込又紙を煮て鹽をぬりさぐり新なる車三度さぐり

して水方の如く雜巾よく巻結ぶ

又方 上酢小黃糜粉を煎し其中小へく煎し焙ぶ

又方 川芎をよく煮るもよ

○樹木

又挿花ふら及物と忌とまじり只折るの過ら少

○升水

升水の方小湯よく煮るあつても若尚水上くた時ハ或ハ灰汁

或ハ石灰或ハ上酢よく煮るこもりり素湯ハ軽く次小灰汁

次小石灰水次小土酢と次第に作り懸技葉の形勢時候等小
應ぐり一づとも一定一が一一考ふべし

添

竹と伐得く直りに割是て水小生として其ま花器或は
紙上小立置業り此竹葉或は一日或は一日半ふとの間保つ
そのり懸葉小養ひ水で灌ぐ此水の潮水小浸は
潮水亦自由ある時の塩苦汁まらん白砂糖ふとて浸は
此水り加減其時小應ぐ

○

都て水上がたりの大葉を摘捨べし古葉も亦取捨るるあり
水文小和木州とらふ艾とりの唐鹿尾藻とらふ乾蜀椒あり

附方之部

○温室冷害之辨

栽樹家剪花者各其家小因て製法其方

異同あり諸花を温室小入ると冬月之寒中殊小後且剪花の要る
身麴室小如く是湯を以て蒸米其氣を發せり此其蒸氣實は温和
至妙之候しあぐり此を温室とて開き花の腰長くて光澤はさく
暖炎の月小冷害と用ふる三月清明の頃より九月白露の頃まであり
是も時候晝夜を温冷とよく考ふれば花悉く潰乳するもの
是で考ふると其時臨まざれば辨じし或は冷害も夜多かりて

暖氣を含むとらり此時戸外より出して冷さば又冷害の最上の井
底小止之是も夜分は却て暖氣を含む故小取さく戸外の地小出
置冷氣強く花開くと逢へ又夜雨を防ぐべし是剪花翁の口
訣茲小頭よりせりよかりの量るべし

○挿花撓枝之方

幹枝の其撓をかり所は和らうかる毛綿と程よ
く巻水より湿してかり所と撓て撓る直ちに曲るるは彈折る
又若菜艸草紙と巻水小浸し撓じびづきも撓て撓されば彈け
折る又水仙もびづき葉組して紙と巻水置癖付て後用之べし

○古木切口墨打之方

圖の如く曲り屈める古木の上小大枝の古き切

はりそのと好このゆりに花黒小まんとするは株本の切口ありて
傾れくまるとれぬのは是の好のゆりに見えて中心と思ふ所小端を付上
り釣かん其下に桶と居此桶の中れ切口を入静めく水と威糠と時と
きつて古木と取らげ糠の止付る所と切改じべし

○挿花剪口之辨

花の莖或は枝などの剪口と焼けり煮あつら
まも水と井させ後小花器と杆之此焼く所煮る所と剪捨
ハ勢い劣るもの之着きりも水よりて即時切へし暫く水と
て後切時よりび水よりびづき切らるるは

○逆灌て厭ふ花の事

○荳若 ○一八艸 ○蘭菰 ○眼皮 ○甘藷蒲

○仙翁花 ○石竹ふどん ○南燭の花をいりて葉を忽ち落散す

又實も悪し尚此の諸花も此意不做す

○萎凋花葉と蕪回を傳 總て剪得る草花と直ちに升水

の葉と施し挿花を以て若挿過る時を手と盡し故に殆ど萎凋じり

あり又剪得る後稍時移るものも亦生氣損し萎凋り是を剪之の

時を勢ひ復さんといふ難し此を以てざる業の所謂剪花翁の手煉ふ

在今是と辨じし惣て萎凋る草花の切りし冷水と逆浸して冷地を

て濡延て覆ひ其上より冷水と強く灌ぎ置暫くすれば蕪回を又蜀葵

錢葵ふどんの如きのもの切りて冷水と逆灌し薄き濡延小巻き淺き盥

う又ハ蘆鉢あはれ焼く挿入あり横小圃より冷水と種く焼き置良

暫して勢ひ剪之の如く感ふるを以て後本方の如く升水の業と強じ

○季花並葉と撮口訣 秋より劇く冬に至りて咲出せる梅椿山茶花

冬牡丹など各花は早き代賞せり然るに此花春小至り其終開くせ又

實も登りせ置其樹勢薄く翌秋の花早うは故に眺みぬ不用の花

も中々咲くも亦季に至る花も悪く撮て後寒中は大便へのト又苗を結

び 蒼も咲く木の馬小池より新葉かき取り夏末より古葉を

摘去蛛の巣諸虫枯葉を速に拂ひ除け樹裏に風透せしむべきに

樹枝も以て十分勢ひはかり秋に至りて花も中々咲出ると又實を結ませ

わすれにまへ〜さきや實と得る要らざるもの論の外より葉刺
の葉を既小牡丹梅ふらむ云〜如く諸木もに此心得専らねとド
是剪花翁が深樹〜して外小知〜とにけらる

○盆栽の辨

盆栽のものの水氣く下に滴る〜要らんとて底の穴と
大きく明べ〜底の内り形を漏計の如きがは底を〜平らうを〜水の滴
中々にミクイま〜りて漏計の〜補ひ繕ひ〜滴り悪けれ根腐〜又
穴を寒う穴の大小小焦〜陶器の缺を〜も底肌をよく透す〜は
〜と土を〜ふ先つ小石〜も穴の蓋を覆ひ押〜其上ふ荒砂又
其上ふ中砂又其上ふ細砂と段〜布て其上ふ回莖土と〜回莖土り

らん時を細らる砂交り土〜是〜水氣く滴〜もの諸州木

〜は是ふ効〜○蘭○万年青○馬蘭〜の葉先焦〜りの根

腐〜故〜是を觀つ〜又肥氣盡〜葉先焦〜ものり〜

配〜〜總〜盆栽物を夏月外小出〜して段簀〜りて日覆〜

若大風雨の節内小取〜〜寒〜地栽のもの十月より翌三月迄

霜雪の覆ひ〜温室小〜も其〜もの盆を地中に埋〜

〜て盆栽もの肥〜都て油粕〜〜又地栽のものも油粕〜

〜〜〜と蟻の油粕〜喰ひ盡〜三日〜使い〜早〜是は
防〜方の油粕〜直〜其上ふ濃き泥水〜灌ぎ覆〜

遷室之圖

古枝と蔓の方へ三步

うけ少筋建小切

蔓の葉一枚おき

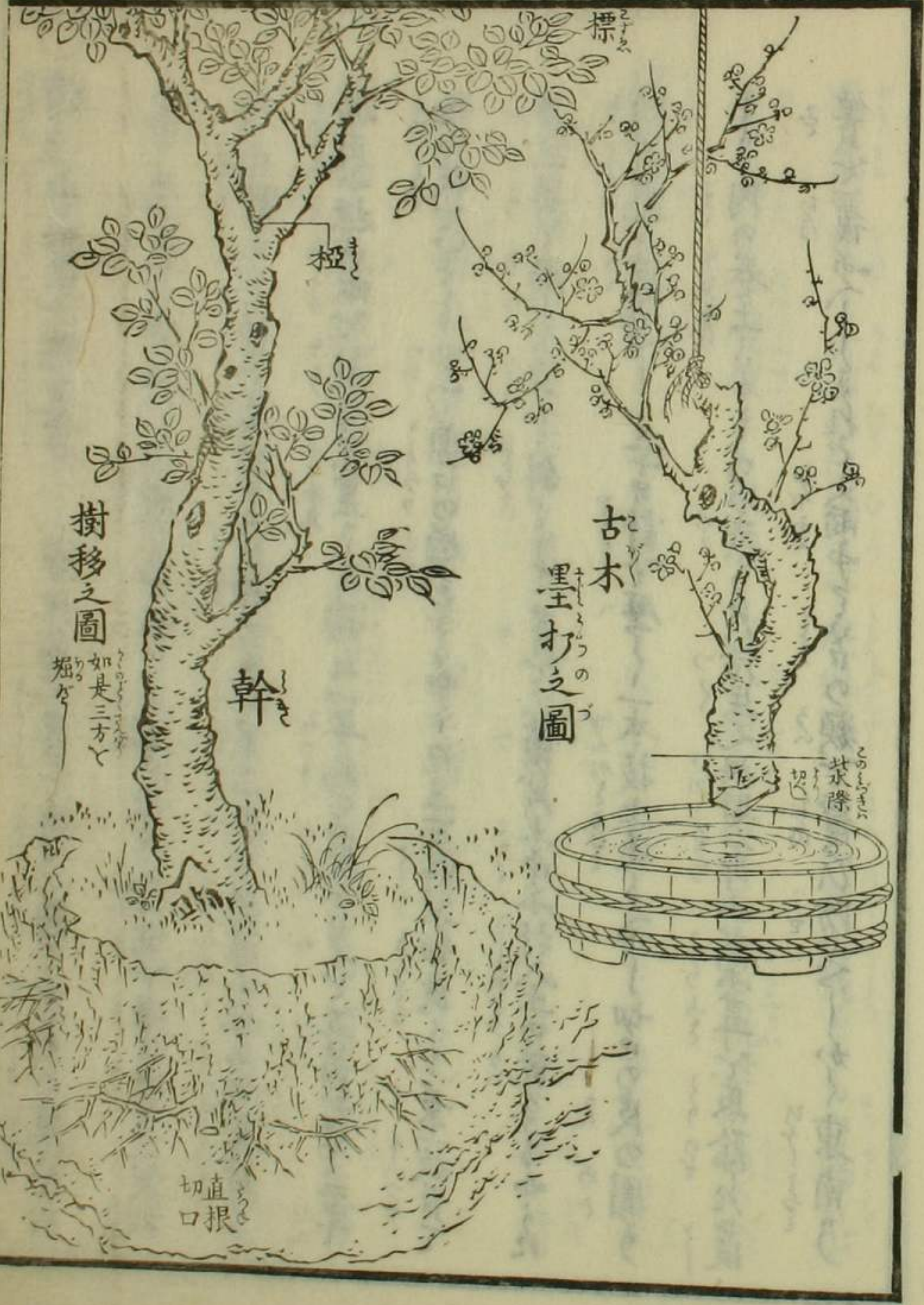
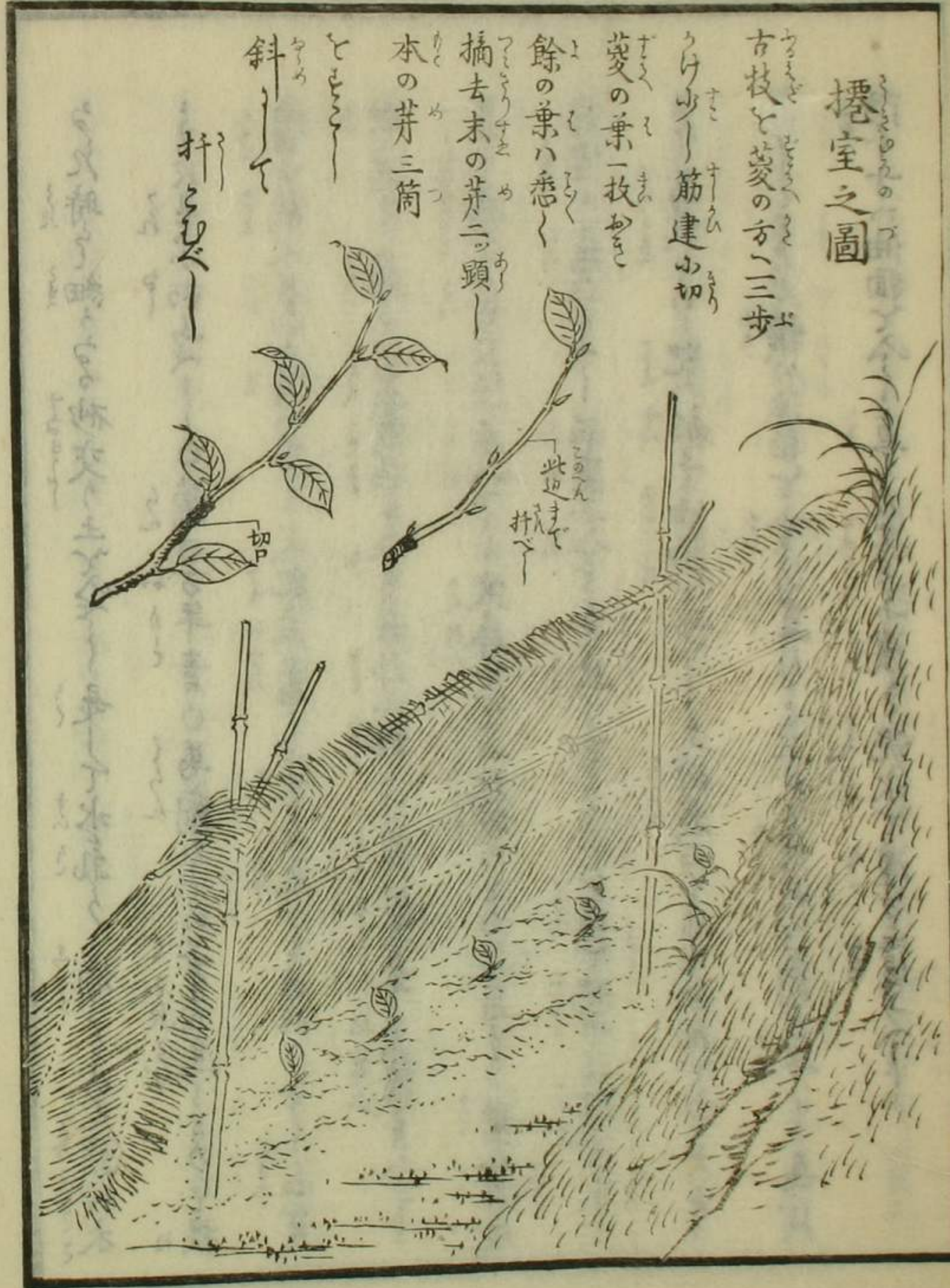
餘の葉ハ悉く

摘去末の芽ニ頭

本の芽三筒

斜

挿し木



樹移之圖

如長三方

○椿並山茶花摺之方

方地の西北の方と遮り隔て東南の陽面

受ける山麓○岸塘○土蔵○築塀○屋舎あぶの際間と去る更五六尺或ハ一丈許りして西北に向ひける斤卸り藁葺小屋と南流小地上迄葺卸り其内小摺の取と設け立置きて椿は一年物の莖小芽と五箇わけて二年物の枝といさう付て剪口の爛まざるやうに三寸許り切放し葉一枚付て芽二箇と頭一少一斜りて芽と三箇は土中小挿入土の乾きぬやうに折水と流さぬに三寸許り歴一本技上見ると切口の皮の圍りより肉の巻上るその内残る活生之此時節小藁葺と取除た葎篋と覆つてこれと大雨中と苦の類と覆ひ防ぐかく東南

陽氣と受り方小向ひ温室と建純陽と前ふ惹て後より亦陽氣と此の時を冷暖程よく徹さう之此外根生だがたりの大概此方に徹さ

○同時節の辨

八月中旬より十月迄小咲出椿のつた正月雨水

の節挿べり十月下旬より咲出椿の如き春彼岸より少く早く挿るは長開花小遅速らるはりて摺の時も亦遅速らるる

○株接牡丹捷木の方

畝地或は花壇ふとも下地小荒砂と三寸

許此上小中の小砂二寸許都合五寸許敷ふは母上小株と置居砂と根を薄く埋も又尋常の土と薄く置其上小肥土とりて接所の一寸も埋り許小覆ふべし如砧根より生じる芽の悉く缺取して二年をうり

それ接穂より新根既生じり之此秋彼岸小堀出り此新根と
大切なる一砧木の勢以強かりぬゆて四五根残して其餘の根は悉く切去
前の如く此所小植置一年許して秋彼岸小堀出り接穂の新根既小
殖出らるもの之此時接所より砧株を切放し捷全く其の正木と成之
諸木は捷木も亦是小准知まべし此時土竜と殊更小厭ふべし是を防
ぐに髪を落し其通へる穴の所に詰置べし又竟小肥も亦るもの之

○接木砧之辨

樹木實るものより鹿木とより此實るもの砧ふ
かる頃其所を接も可之れ此鹿木と三月の頃小堀出り直根を切
去木の末で止て好むる所小移置翌年春彼岸の頃芽いさぐと出らる

接ぎ寄接切接の砧とも皆是の如く合木の更總を桃砧小梅香
等以接合生易く成長も亦速し故小低接して接所を地中に埋め
接穂より自づから新根を生れ漸く成長して竟小砧木と切除らる
捷木とより之を桃砧を斂短きもの故小竟小切放し心得て之をト
○砧木の太さ中指許のものより徑二寸許る迄最し其より大きき
ものとも接がらん小の強かり好はるゆて又大樹小高接ともも
同一つぎ止しは待たれ接ぎまれ○桃と桃と接合しても捷木に
へし○梅杏凡五小接小各砧穂好し此二種樹の斂長く實も歳々登る
梅杏砧小桃と接ても可らるし其より小櫻砧八山科櫻の種と時

へ一是と山櫻といふ○梨海棠林檎各砧好や一右外種より
既小本條毎小のり宜く併せ考ふべし○因ふは榎栗接節春彼岸
五音許後一○枇杷上節小音許後一○柑橘の類ハ枳殼砧之
接節ハ花のまご開く時即此答蕾まへ之或採天で佳時とん

○寄接之傳

砧木の接所より上方小芽一箇残りて未だ切去べし
此芽一箇肝要なり一芽損んば氣詰りて枯るる更なり地植ても盆
裁しても取へき親木は枝より寄て接得く後砧木の上下小出芽の分意
く除去へし是を接所の勢ひ強く登りて肉早く巻之又上方芽多
けまらぬ氣登り過ぐ肉の巻甲斐に叔此業ハ砧穂もれ思ふ所の皮且て

互ふ合はるる木肌かからぬ中うに削り剝く合接細繩りてとくと巻堅
り其上で油紙を雨の入りぬ様より巻を藁をりて結ひ止置之
又風は動るる様小相應の竹木もて建く時と結添置之後一二年許
して穂の接所の本の方少しで漸く切目の癒と付置後此穂より切離は
盆裁の木は穂で其休天樹小添を接と接接と云接方並ひ同し

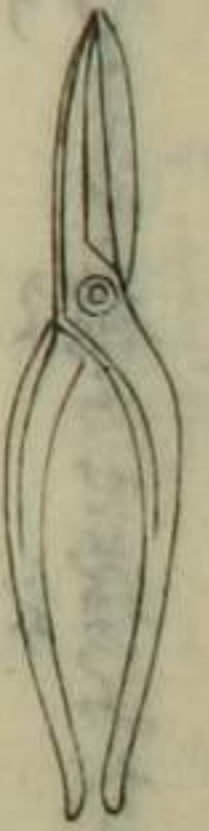
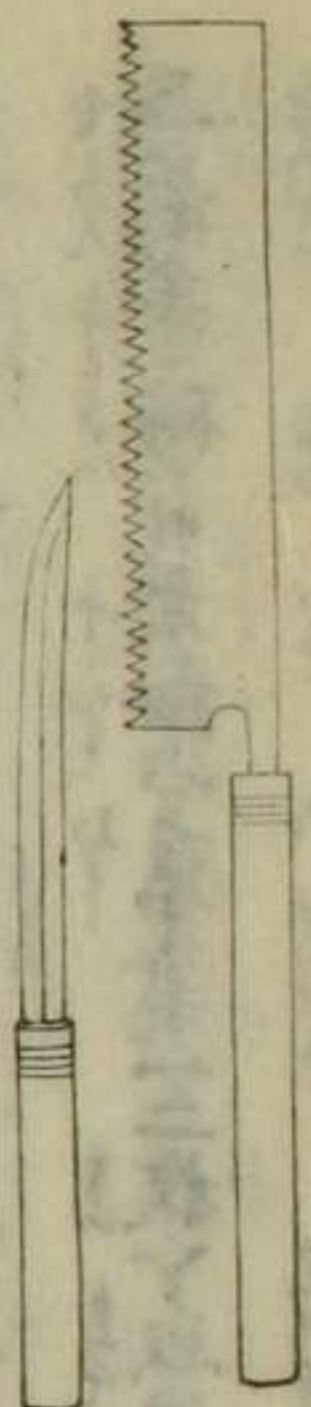
○切接之傳

凡接木でもん小刀行又ハ諸又法ハ且又の簡並ひ又
鋸目 是のうた猪目にて至て細く
剪刀 擗葉 細繩 馬蘭葉 大竹
皮等と整ふべしとて切接の業ハ砧木の皮は爛色より中より直平に切
此切目と小刀と皮目もれ精しく削りるしとて接穂を葉の中程に

其末の六芽大く宜く凡木の方の直の所と長寸五七寸許小芽
 五箇許はて並傳へ此穂の刺を中へ下は芽二箇残し下の芽三箇は
 此芽の傍の皮と長寸或は寸三五分迄穂の大小は穂と刺は
 木膚と削るが凡削る口を挿し隨分平く削り又裏方の切口を
 片削りては口小合をなぐ砧木の向陽の方平く美しき皮目と穂刺
 一長小聊も狂くめ中へ又木膚にからめ中へ小刀を堅小批き下り其終
 又して木膚と撫掌り直り接穂と拵へ此砧木に接穂と拵小皮目の
 合せ方而已肝要之諸家の方且書傳もいまも其至妙の見えんを砧穂
 ともに合せ目の皮と削り砧木の削口の廣く接穂の削口の定く扶し斯も

双方廣扶りて左右四所は皮目合せらるるを或は悉く活生かじられ
 砧木の削目の正しき方と接穂の皮目と拵せ令し且砧木の皮の削止
 り小穂の片削の口と拵拵木の削皮と接穂の背小穂の著
 せ細繩りて下の方より強く巻掌り繩と拵ひし之此覆ひ著せ
 一皮目の小口接穂の左右の小穴より雨露の合るるに馬蘭或は竹皮
 をも捲く裂て襟のくは外の方より巻覆ひ下の方より葉を拵へ
 して砧木の切口と油墨とくゆ塗乾し其上小填土と積置又竹皮或は
 馬蘭等砧木太細小穂二三枚を以拵折りて被らせ覆ふへ
 活合して夏小至り芽成長し被皮と樹皮少く裂破るへ此被せ

切接の圖二三の次第を以て標しん



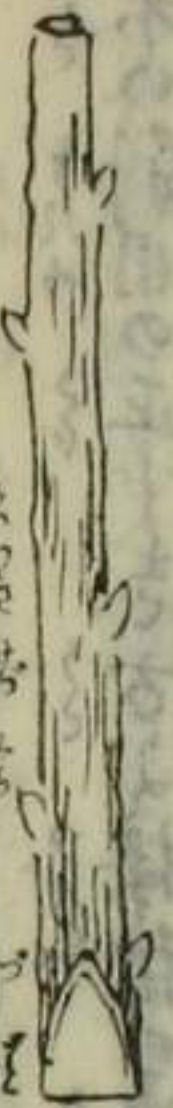
一 砧木接穂の切目削目は皮膚の棚を移さず



二 接穂砧付の削り口



三 接穂砧付の削り口
同皮竹の削り口は皮まで削り
五つの芽小穂付をくぐら



二 穂削り口は上下同



四 削り口は木理と削り口は皮と少く削り



五 砧穂は合せ月ハ互小膜の粗詰り
能く用之 是接木の専要なり



六 此種は合せ月ハ互小膜の粗詰り
穂の合せ月ハ互小膜の粗詰り



七 合せ月ハ互小竹皮の雨露を防ぐ
杉米のこく米術



八 砧木の切
此種は合せ月ハ互小膜の粗詰り



九 此種は日景雨風を防ぐ



十 此竹ハ
鳥を防ぐ



覆ひしもの鳥の啄くところあり是新芽を損り又新芽漸く長大小
 中ぶ時大風雨にて接所離れ損を故小竹木等と建係助ぐ
 是れをくくして接の處を合活なり高接も同一又割接も此が
 て斤寄せ接へ一都て接木一切穂と砧との皮目正しく合ふ合活
 どもつてゝゝ〇水接〇腹接〇挿接〇副接等の業ハ諸書
 にも出ぬゆゑも其至妙の見えん且を煩くしてさゝる所詮
 もる唯切接寄接等ハ業小止之又割接ハ木小固てゝん可之
 〇移樹之辨 移んたりハ樹ハ一年に株根と半分又二年ハ半分と都
 合二年ハ兩度一株の遠りと掘回し置て此掘穿つとん横根と切小切

口乃爛りたりやうを切ると〇此切り新根生ると直根の株底
 又諾て悉く切去り又自生ハ木或ハ長床より大樹もハ是非なく
 一時小りの移さん先つ前の方より隨分深く掘下りては左
 右の土と前の穴にて撞受く取去り一俣は是のぬ前と左右と二
 方と深く掘下りて前の下より奥小掘へて竟小株底半過小半と
 此時前左右三方小拳俵等にて株根と權と繩にて巻きて後
 の方と掘穿り横根やび株底より根と割終り拳俵もハ覆ひ
 全株と繩にて臈と堅むべし〇移すべき地と掘樹と取ら繩俵
 と取去り〇或ハ其俵小置りて四方に掘揚所の土と細りに

碎き株根を八分目埋めて水で溢る許小汲み此水の溜る度とどど
 又此上土を入幹と動せし土水よく和せ合ふ此圍りに土を築回し
 水と湛る料とをさうて樹の風小動揺するは防ぐとあれ竹木の類と建副
 一掛次第小繁密小森く蒸らに至る時小短枝或古葉枯葉
 虫葉をば株捨く風透せよとて割られ花自ら早く実もよく登る
 ○樹木成長し中程小至る体後枝梢漸く衰散して花と結ぶるもの
 土地小飽泥むなり是を弥床弥地とせし早く外地小移し青く
 果して盛小ありよと花と結ぶ

○三月末まで花開へき樹を正月末小移し二月中旬小花茂くものなり

桑木四年文五月取除

木竹馬苑



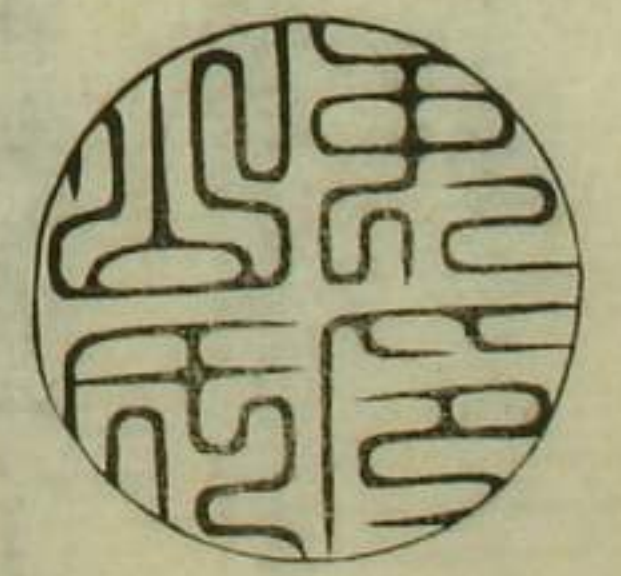
○樹木盛小長て後伸せしなり中梢の勢の漸く薄くなり花實年減
 少なるもの其期を量て早く中梢を伐せしめかこれば標枝廣く
 繁りて花實數多とせし大抵の苗木古樹も中梢を伐せしめ
 一々櫻を梢標とせし切ては禁は

剪花翁傳前篇五 大尾

慶和齋集前篇卷之五

嘉永四辛亥五月成刻

水竹亭藏版



[Faint vertical text, likely bleed-through from the reverse side]

1151

土屋氏

三ノ子三六
又ノ子六
又

